

労働市場の構造変化と課題

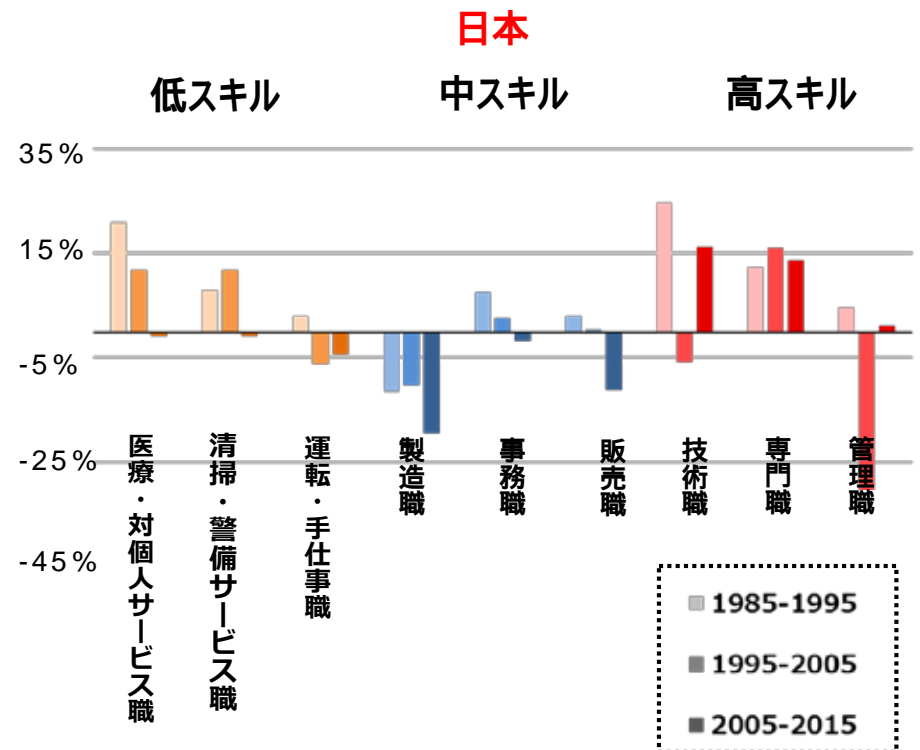
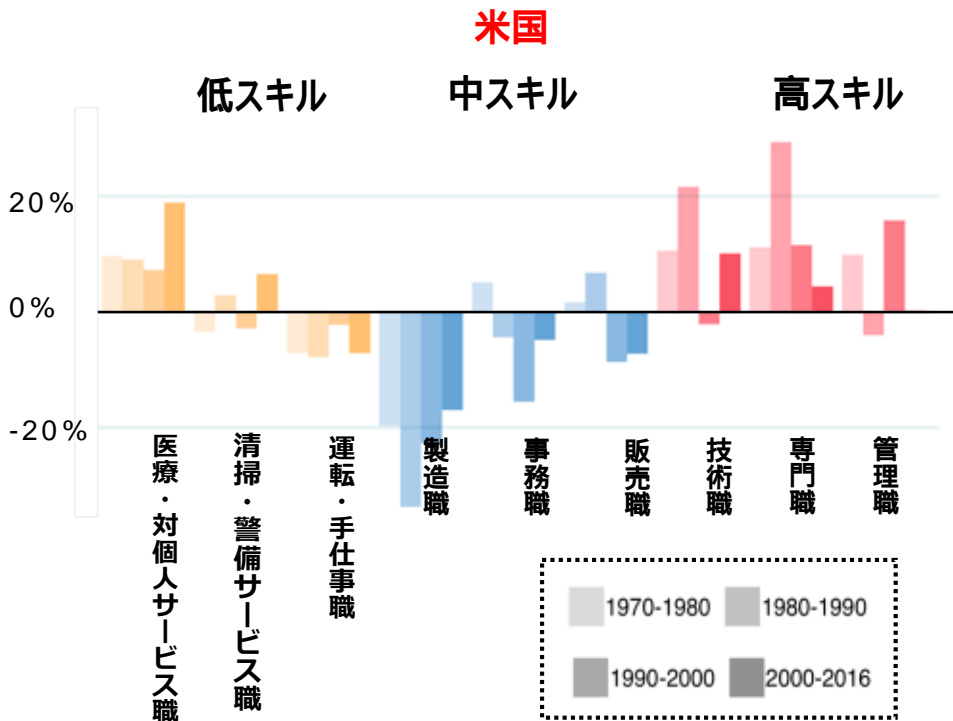
平成 31 年 3 月 27 日

世耕議員提出資料

IT化・AI化による「労働市場の両極化」の進展

- 米国では、専門・技術職等の高スキル職と、医療・対個人サービス等の低スキル職で就業者が増加する一方、製造や事務等の中スキル職が大幅に減少。
- 日本でも、同様の「両極化」が確認された。

職業別就業者シェアの変化



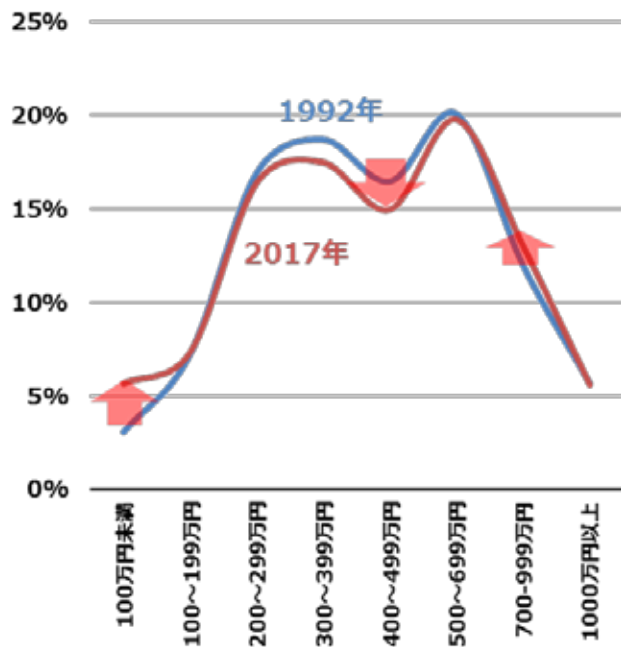
(左出所) Autor (2019) 「Work of the Past, Work of the Future」

(右出所) 総務省「国勢調査」を基に作成。Daron Acemoglu, David Autor, "Skills, Tasks and Technologies: Implications for Employment and Earnings" (2010)を参考に職業を分類。なお、左図の米国の分析と異なり、職業者数のシェア変化(米国は総労働時間)であること、全年齢が対象(米国は16-64歳)であること、清掃・警備職には自衛官を含む(米国は軍人を除外)ことに留意。

所得構造の両極化

- 左下図の日本の過去25年間の所得カーブの変化を見ると、男性では300万～700万円（中間層）の割合が低下する一方、200万円未満の割合と、700～1000万円の割合が増加。
- 米国では、中下図のように大学院卒に比して大学院卒の賃金プレミアムが拡大。我が国でも、右下図のように同様の傾向が確認され、年齢を重ねるごとに大きくなる傾向。

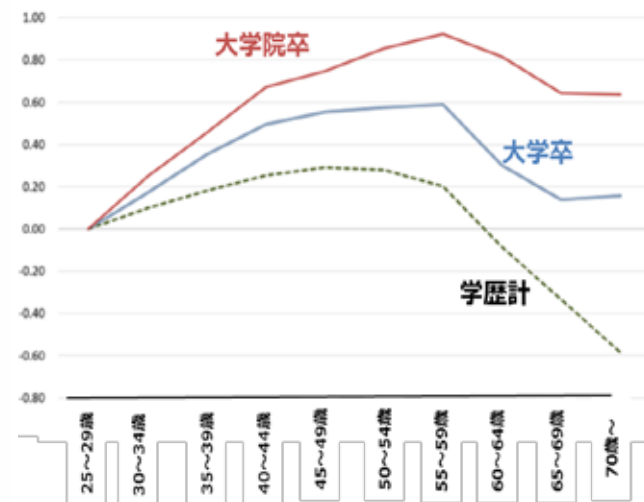
日本の所得階級別の割合変化
(60歳未満男性)



米国の学歴別の賃金推移（男性）



日本の各学歴における年齢別賃金カーブ



(左 出 所) 総務省「就業構造基本調査」を基に作成。
 (中央出所) Autor (2019) 「Work of the Past, Work of the Future」, 18歳-64歳の実質の週給。
 (右 出 所) 森川 (2013) 「大学院教育と就労・賃金：マイクロデータによる分析」。